

漢文が日本人の知力を支えてきた

出口 汪
でぐち ひろし

昨今、大学入試での漢文の出題も減り、生徒の側でも漢文を学習する必要性をあまり感じなくなっているように思えます。ところが、日本の教育にとって漢文学習は不可欠なものと言えるのです。

その第一の理由は、日本の知識人は少なくとも江戸時代までは漢文で思考していたからです。これは奈良・平安時代からの伝統であり、仮名文字はおもに女性の表現手段でした。漢文は和語と比べて抽象概念に強く、しかも、論理性に富んでいました。そのことが、日本の近代化に大きな影響を与えたのです。

このことが漢文を学習すべき第二の理由になるのですが、日本は近代化に当たって、欧米の思想・技術を取り入れるのが急務でした。欧米のそれは一神教であるキリスト教を土台とした抽象的・形而上的な傾向が強いものです。ところが、江戸時代までのいわゆる古文では抽象概念を表現することが困難でした。当時の知識人たちは江戸時代には武士階級です。彼らは普段から漢文で思考したのですから、欧米の抽象語をいとも簡単に漢語に置きかえたのです。そうやって、明治以後の日本語が形作られていきます。江戸時代までの日本語と近代以後の日本語が大きく変化したのはそのためです。

こういった歴史的経緯を鑑みると、生徒に強靱な日本語力を習得させるためには、漢文の学習が不可欠だと考えるのです。

漢文の学習では、一つ一つの漢字の意味に着目させることができます。漢文の語順は「読_ム書_フ」のように補語より述語が先に来る場合があるなど、日本語というよりも、むしろ英語に近い構造です。さらに、漢文は非常に論理的なので、感覚・感情に左右されやすい今の子供たちには有効な訓練となるでしょう。

先ほど欧米の抽象語を漢語に置きかえて、近代以後の日本語が成り立ったと述べましたが、まさに二字熟語こそがすでに漢文の基礎ではないでしょうか。単漢字が組み合わせられて二字熟語ができあがるのですが、その結果、漢字は様々な意味に溢れ出します。文章の中で意味を担っているのが自立語ですが、付属語はおもに助動詞・助詞・接続詞・副詞などで、これらは基本的にはひらがなです。つまり、自立語の大半が漢字、特に二字熟語だと考えれば、漢字の学習は新たな意味を持つてきます。

漢字はただ読み・書きができるかだけでなく、漢文の学習の基礎であり、抽象語を中心とした意味の世界であり、論理の出発点でもあるのです。

そういった意味でも、漢字・漢文の学習の必要性を再度確認すべきではないでしょうか。

出口 汪（でぐち ひろし）

一九五五年、東京都生まれ。

大手予備校講師を経て、現在は出版社水王舎代表取締役
や広島女学院大学客員教授を務める。

主な著書

『出口の好きになる現代文シリーズ』（水王舎）

『出口汪の「最強！」の記憶術』（水王舎）

『出口汪の日本語論理トレーニングシリーズ』（小学館）

『やりなおし高校国語』（筑摩書房）など

「鴻門の会」は こんなに面白い！

「知識不足のまま『鴻門の会』の授業をするのは、サンダル履きで富士山に登るようなものです」。そう語る井口葵先生は、現在教員生活七年目。初任校で松家滋先生の手ほどきを受け、「自信を持って授業をしたい」と、今も教材研究に奮闘中の日々だという。

一方、教員生活四十二年目となる松家先生は、都内を中心に教材研究の会を主宰している。「学びの基本は、『知りません。教えてください』だと思います。井口先生はこの言葉を何回となくぼくにぶつけてきて、それがぼくにも勉強になりました。若い人は、知ったつもりにならないで、どんどん疑問をぶつけてきてほしいですね」。

そんなお二人のやりとりを、Q & A形式で誌上でご紹介します。

■「鴻門の会」とは

井口 そもそもなぜ「鴻門の会」に焦点が当てられるのでしょうか。

松家 この会見は、本来沛公が項羽に対して全面降伏をする場面だということとをまず確認しておいてください。この会見は二人の、そして楚と漢のその後の命運を大きく変えることになるのです。范増に沛公を殺すように言われていながら、とうとうそれができなかった項羽は、後に沛公によって滅ぼされることになります。歴史の転換点としての意味が大きいのです。

また、この部分の文章は、『史記』

の中でも屈指の名文といつてよいでしょう。司馬遷はかなり力を入れ、さまざまな工夫を凝らして書いています。たとえば、直接話法の効果的な使い方、まるでその場において出来事を見ているかのような戯曲的な書き方など。繰り返し多用もそのひとつでしょう。

井口 「会」とは、どんなものを指すのですか。

松家 「会」というのは、春秋時代に諸侯が集まってする「会盟」のように、勢力の差はあるにせよ対等の者同士が会見することを目指していました。沛公が項羽に降るこの出来事に用いるのは

コーディネーター

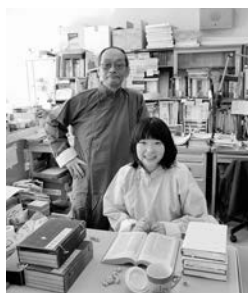
まつい しげる
松家 滋

(都立国際高等学校)

質問者代表

井口 葵
いぐち あおい

(都立雪谷高等学校校定時制)



ふさわしくないということなのでしょう。「鴻門の会」という言い方は『史記』にも『漢書』にも出てきません。『後漢書』になって、更始帝とあるエピソードの中によく出てきます。以来、この言い方が定着してしまったのです。現在、中国ではふつう「鴻門宴」と言われているようです。

■舞台について

井口 咸陽、函谷関など、実際に行ったことがないのですが、どんなところなのでしょう。

松家 「陽」は、山の南、川の北にあ



現在の函谷関。手前は老子の像

る土地に付けられる名です（「陰」はその逆）。たとえば「洛陽」は、洛水という川の北にある町です。「咸陽」は九峻山の南、渭水の北にあるので、咸、つまり「みんな」陽という名なのです。秦代には壮麗な都だったのですが、項羽に焼かれ、その後は都が東南の長安に遷り、咸陽は寂れてしまいました。唐代には西域に旅立つ人をこの地まで送る風習がありました。王維の有名な詩「元二の安西に使ひするを送

る」に出てくる渭城はこの地です。

函谷関は咸陽と洛陽のほぼ中間にあります。いま靈宝という小さな町の北の郊外に、立派に復原された関が建っています。ただこれが函谷関のかつての姿そのままとは到底思えません。この建物から西の方には細い道が続き、両側には山が迫って崖になっています。当時はもっと険しい地形だったでしょう。なお、関というのは軍事要塞だったことを言い添えておきます。

■人物について

井口 項羽、沛公はどんな人物ですか。

松家 それぞれの本紀の冒頭に、出自や若いときのようすが描かれています。司馬遷は（おそらく）意図的にこの二人の姿を対比して記しています。始皇帝の行列を見たときの、この二人の言動の違いなど、読んでおくと参考になると思います。また沛公の人となりについては、「高祖本紀」よりも同じ時期の世家や列伝に書かれていることの方が参考になります。

井口 項羽の一族は、どれくらいいる

のですか。

松家 祖父は楚の名将項燕。父親は、一説に項渠と言われていますが、よく分かりません。その弟が項梁で、反秦の旗揚げをした中心人物。項伯は項羽の季父（最も下の叔父）で、鴻門の会での働きにより、後に漢に降り射陽侯に封ぜられます。項荘はいとこですね。項它という、やはり後に漢に服属して平臯侯になった人、項襄という桃侯になった人もいます。他には、項声（項羽の弟とも言われます）、項嬰、項悍、項冠などが『史記』に出てきますが、いずれもはつきりした系譜や事績は分かりません。敗者ゆえに歴史からは消されてしまったのかも知れません。

井口 教材には「劉邦」という名前が出てこないのですが、「沛公」についてどのように説明すれば良いですか。

松家 実は『史記』の中には「劉邦」という名は出てこないのです。さらに『漢書』にもない。この名が文献に出てくるのは、ずっと時代が下った後漢代に荀悦の著した『漢紀』に「漢高祖諱邦。字季」とあるのが初出のよう

す。沛公というのは、挙兵した時にまず沛県の県令に推されて沛公と号したことから来ています。後には漢王、そして高祖と呼ばれるようになります。

井口 沛公について書いてある「人をして其の氣を望ましむるに、皆竜虎と爲り、五采を成す」という部分について想像ができません。「氣を望ましむ」とは、どのようにするのですか。

松家 「氣」というのは「雲氣」のことだといえます。「高祖本紀」にこんな話が載っています。始皇帝は東南に天子の氣があると聞いて、東遊してこれを鎮めようとします。このとき沛公は、それは自分のことではないかと思ひ、山の中に身を潜めていたのですが、その妻はどこに隠れていようとすぐに探し当ててしまいます。不思議に思つて聞くと、妻は、「季の居る所の上、常に雲氣あり」、それを目当てに探し当てたというのですね。沛公の居る場所の上には、天子の雲氣が常に漂っていたということになります。それが竜虎の形をしているのでしょうか。

ただ、これは誰にでも見えるという

ものではありません。特別の修行をした人、たとえば方士などに限るようです。沛公の妻に見えたのは、やはり愛情の故でしょうか。

井口 項伯の前科を教えてください。人を殺して張良がかくまっただけの話をきちんと知りたいです。

松家 この話は「留侯世家」に「下邳^かに居りて任俠を爲す。項伯、常て人を殺し、良に従ひて匿^{かく}る」とあります。実は張良自身も始皇帝暗殺に失敗して下邳に逃れ、隠れていた身でした。「項羽本紀」でも「秦の時に臣と遊べり。項伯、人を殺し、臣、これを活かせり」と張良が語っています。しかしこれ以上の詳しいこと（誰を、なぜ殺したのか、など）は分かりません。

井口 范増について教えてください。

松家 范増は「項羽本紀」に居郷^{きやうきやう}の人として登場します。「年は七十、素より家に居り、奇計を好む」人とあります。范増の献策によって、項梁は楚の懷王の孫を探し出してきて、王として擁立します。項梁が討死した後は、范増は項羽と行動を共にします。

鴻門の会の後も范増は項羽に従っていたのですが、沛公の家臣となった陳平の策略によって項羽に疑われるようになり、とうとう項羽に見切りを付けて去って行きます。しかし気の毒なことに、故郷に戻る途中で背中に腫れ物が出て亡くなってしまいました。

■理解を深めるために

井口 沛公が奪おうとしたという「珍宝」とは、具体的にどんなものですか。松家 博物館や図録などで秦代以前の文物を見るのが参考になりますね。沛公が項羽と范増に贈り物として持ってきた「白璧」「玉斗」や、「留侯世家」に見られる「宮室・帷帳・狗馬・重宝・婦女、千を以て数ふ。」という秦の宮殿のようすなども参考になると思います。

井口 「美姬」とは、宮中にどのくらいいるものなのでしょうか。

松家 後世「後宮美女三千人」という言い方をします。この「三」は後述するように実数ではないでしょう。実際の人数など、皇帝も知らなかったのだ

はないでしょうか。

井口 謝罪の場面で、なぜ沛公は「小人の言あり」と言うだけで、曹無傷の名を言わないのですか。

松家 密告があったことも、またそれが曹無傷によるものだとも、沛公には分かっているから明らかならないう。それが項羽の口から明らかにならう。沛公は本当にびくびくしたであらう。

そしてこれを言ったことで、今度は逆に項羽が自分の行動を弁解する形にならう。しかし、こんなことをあつさり口にしてしまふ項羽もずいぶんです。これでは曹無傷は当然殺されてしまいますよ。黙っていて曹無傷をもつと利用してもよかつたのに。

井口 宴席で、范増が項羽に玉珠を見せる動作をしたのは本当に三回であらうか。また、三回の回数の意味はあるのであらうか。

松家 漢文で「三」という数字が出てきたら、これは要注意です。「三」というのは必ずしも実数ではなく、「たくさん」「何度も」という意味を持つ

ことがあるからです。范増は本当に三度示したのかもしませんが、「何度やってもだめ」ということで「もう項羽には沛公暗殺の気持ちがあなくなっているな」という判断を下したのであらう。

井口 玉珠とはどういふものですか。アクセサリのようなものであると聞きますが、普段から男性も装飾品を身につけるのですか。

松家 玦というのはいすずく状の輪の一部分が欠けている形の玉のことです。ここではこの「玦」の音が「決」と通じるところから、沛公を殺す「決断」を迫るために用いられているのです。男性もそうした装飾品を身に付けます。これがひとつの社会的な地位や身分を表すものであつたのだらう。貴重な玉は



玉珠（上海博物館蔵）

十五もの城市に相当するといふ話が『史記』にあります。「完璧歸趙」、そう、「廉頗藺相如列伝」の中の藺相如の活躍に手に汗を握る場面です。

また『荀子』「大略篇」にはこんなくだりもあります。「諸侯が人に贈り物をするとき、人を手厚く招くには珪を、国事を問いたいときには璧を、人を呼ぶには瑗を、絶交するには玦を、よりを戻すには環を、それぞれ用いた」といふのです。これらはすべて玉器ですが、珪は上丸く下にかどのある瑞玉、璧以下は円形で丸い穴のあいた玉。璧は穴の大きさが肉の幅の半分、瑗は穴の大きさが肉の幅の倍、玦は肉の一隅が離れている、環は穴と肉が同じ幅（金谷治による）です。

井口 「寿を為す」ことは、一般的なことなのであらうか。また、剣舞は誰でも簡単にできるものなのであらうか。

松家 「寿を為す」といふのは、杯を献上して目上の人の健康と長寿を祝うことで、それ自体は特に変わった接待というわけではあらず。また、撃剣を学ぶことは、士大夫・君子の教養

として重要なことでした（だから若い日の項羽がそれを学ぼうとしなかったことを叔父の項梁は咎めたのです）。従って、剣をもって舞うというのは、とくに難しいことではなかったのでしょうか。ただ、この場面では「剣を抜く」というところがむしろ重要なですね。この「剣を抜きて」ということが繰り返して出てくることに注意してください。公の場で剣を抜くというのは、実は大変なことなのです。それだけで叛逆と見なされることさえあります。「寿を為し」で、舞うことを口実にして項莊は剣を抜くわけです。樊噲が闖入してきたときに項羽は「按劍」という動作をします。これはいつでも剣が抜けるぞという姿勢で、相手を威嚇する動作ですね。また、豚肉を出された樊噲は剣を抜いてその肉を切って食べます。何でもないことのようにですが、これで樊噲は剣を抜く口実を得たことになるのです。これは項羽の側に見れば大失敗だったのです。最後の方では范増が剣を抜きます。これは沛公からの贈り物を粉々に壊して、自分の嘔き出して

る怒りをぶつけるための行為でした。

■「鴻門の会」その後について

井口 張良は安全に陣地に帰れたのですか。なぜ殺されなかったのですか。

松家 項羽が黙ってしまったところで、この「降伏の儀式」は終わったということでしょう。だから沛公たちは軍門を出ることができたのですね。さらに沛公からの贈り物を項羽が受け取ったことで、これは決定的になります。張良もむろん何事もなく自軍に帰ったというわけです。

井口 「四面楚歌」に至るまでの流れが説明できません。どうして項羽は自刎に至ったのでしょうか。

松家 天下が沛公（このときにはもう漢の高祖ということになりますが）に帰したときに、彼は建国の三功臣張良、蕭何、韓信の名を挙げて、こんなことを言っています。「優れた人材を使いこなしたから自分は天下が取れたのだ、一方項羽はたったひとりの人材である范増を使いこなせなかった、だから亡んだのだよ」と。また、かつて項羽に

属し、後に沛公の家臣になった人々の項羽評も参考になります。これはそれぞれの世家・列伝に出て来ます。司馬遷も「項羽本紀」の論贊で、「自ら過ちを責めず。乃ち天我を亡ぼす、兵を用ふるの罪に非ざるを引く。豈に謬らずや。」と厳しく論断しています。

■「史記」の表現について

井口 教材部分では、「諾」「甚だ急なり」など、一言で終わるせりふが多いように思いますが、なぜですか。

松家 短く切ったせりふもあれば、長いせりふもありますね。いずれにせよ、司馬遷がこうした直接話法を取り入れた箇所は話のヤマとなっているところだといえます。たとえば、樊噲と張良のやりとりの部分はこうです。

樊噲「今日の事何如。」

張良「甚だ急なり。今者項莊剣を抜きて舞ふ。其の意常に沛公に在るなり。」樊噲「此れ迫れり。臣請ふ、入りて之と命を同じくせん。」……

そして宴席に闖入した樊噲を見たときの項羽のせりふ。これも短いですね。

項羽「客何為る者ぞ。」

どうでしょう。短いせりふが緊迫感を生んでいると思いませんか。

井口 鴻門の会の席次について、司馬遷はなぜ詳しく書いたのでしょうか。

松家 席次については、吉原英夫に「古代中国の席次」〔漢文教室〕一四八号〕という論考があり、中井履軒の著『史記雕題』から次の部分が引用されています。「堂上の位、堂下に対するは、南嚮を尊しと為し、堂下に対せざるは、唯東嚮を尊しと為すのみ」。つまり「堂上対堂下の場合には南向きが尊位、堂上の場合には東向きが尊位」ということになります。司馬遷がこうした席次のことを書いたのは、沛公が客ならば当然東嚮の席に座るところなのに、ここは項羽が自らの優位を明確に示すためにその席に座ったこと。次に尊い席はやはり項羽陣営の范増であること。沛公はその次に座し、張良はその陪席だったこと（張良だけに「待す」が用いられています）を明らかにしたということになるでしょう。また、この席次が記されていることで、范増が正面に

座っている沛公をどんな目で見ていたか、右側にいる項羽を見ながらどんなにいらいらしていたのか、項伯は、張良は、それぞれどんな面持ちでいたかなどが、読者の頭の中にくっきり像を結んでくるのではないかと思います。

■司馬遷と『史記』

井口 『史記』の構成について教えてください。

松家 以下の構成になっています。

本紀	十二卷	帝王の事績。
表	十卷	年表と月表。
書	八卷	社会制度・文化の記録。
世家	三十卷	封建諸侯の年代記。
列伝	七十卷	個人の伝記。

この本紀の紀と列伝の伝をとって「紀伝体」と呼ばれる形態は、司馬遷が創出したものです。

本紀・世家・列伝がそれぞれ時間の横の流れを書いています。縦の部分（）を併せ読むことで、その時代を立体的に把握できるのですね。

← 時間の流れ →		
本紀	本紀	紀
	世家	家
世家	世家	
	列伝	伝
列伝	列伝	
列伝	列伝	

井口 『史記』に「項羽本紀」があるのはどうしてですか。

松家 項羽は皇帝になったわけではないので、「本紀」を立てるのはおかしいことかもしれません。これは後世の歴史家が批判していますし、『漢書』では項羽は列伝に記されています。しかし秦が亡び、漢が天下を統一するまでの短い期間ではあるものの、そのときに天下を支配した人として項羽をとらえているのです。他にも高祖の妻である呂雉についても「呂后本紀」が立てられています。ここにこそ司馬遷の歴史を見る眼が表れているのですね。

【授業実践】「鴻門の会」を演じる

やまぐち まさずみ
山口正澄

(東京都立本所高等学校)

私はこれまでの授業で、たびたび寸劇や人形劇を取り入れてきた。その目的は本文の内容や場面を立体化して理解することにある。文章だけでは平面的な理解で終わってしまう生徒もいるだろう。日頃の授業から、教科書や副教材等に掲載されている絵や写真を何度も参照させ、時には編集したDVDの映像をプロジェクトで見せて、それをもとに本文の内容や場面をできる限り正しく頭の中で映像化させる指導を心掛けている。それに加えて演劇を取り入れたらより一層の理解が深まるだろうと考えている。なお、寸劇は主に一人芝居で行い、人形劇は登場人物が複数になる際に手持ちのぬいぐるみを利用して行っている。いずれも生徒の反応は概ね良い。今回は「鴻門の会」に関わる三点の実践例を挙げる。「鴻門の会」を扱った時期は二年生の二学期後半である。

1 生徒と演じた「剣舞」の場面

一つ目は授業者と生徒とで演じた例で、本稿のメインとな

る実践である。「沛公 項王に見ゆ^{まみ}」の「剣舞」の場面で、本文は「莊則入為寿。：莊不得擊。」である。

まず、十分程で現代語訳と場面説明をした後に演劇を行った。演じた役は、授業者自身が項莊で、生徒二名が沛公と項伯であった。項莊が剣舞しながら沛公を斬ろうと狙い、それを項伯がかばい守る場面だが、項伯役の生徒が、守る対象であるべき沛公を間違えて斬りつけてしまった。その場面で観ていた生徒達から笑いが起きて「それじゃダメじゃん!」と言う生徒もいた。この瞬間に演劇実践の成功を感じた。

ここで演劇を一旦とめて、「今の笑いがとても大事だと先生は感じたのだけど、その意味がわかるかな?」と質問を投げかけた。すると、すかさず一人の生徒から「だってそれだと沛公が本当に殺されちゃって、本文と違う終わりになるから!」という答えが出た。内容を主体的に正しく理解して間違いに気付いたからこそ笑えたのである。この後は仕切り直して、結局沛公を斬りつけられずに終わるところまでを演じた。

私の日頃の授業では、発表や良い発言をした場合にポイント制で平常点に加算しており、今回の役を演じた生徒にもポイントを与えたが、沛公の役は座っているだけだったので、他の生徒からは「自分が沛公をやりたいかった」と良い意味で悔やむ声も授業後にあがった。

この演劇の実践に関して、生徒に感想を書いてもらった。以下に主な感想を箇条書きで記す。

- ・印象に深く残っているのととても良かった。
- ・見ていて面白かったし、イメージしやすかったです。
- ・誰がどこにいるのかが文章だとよくわからなかったけど、それを目で見て覚えることができた。
- ・登場人物が多くてややこしかったので、あの劇で関係性がつかめて良かった。
- ・演じるにあたって、その場面のことや人の心情をよく考えたので理解が深まった。
- ・内容を分かっているのと演劇はできないものであることが理解できました。
- ・友達が参加することで話の内容をもっと知りたくなった。
- ・クラスメイトの子がやるから頭にその場面がより残った。
- ・実は自分もやってみて良かった。

これまで数回にわたって劇を取り入れてきた結果、生徒も

すんなり受け入れたのだと思う。いきなりやろうとしていたら、生徒は面食らってしまうだけだったかもしれない。

今回の「鴻門の会」での特徴は、生徒を巻き込んで演じられたことである。生徒が演じることで、見ている側の生徒の関心も高まることを期待した。さらに間違って演じてくれたことは想定外の収穫であり、この点でも大いに生徒達に助けられた。惜しむらくは教壇のスペースを舞台としたため、演じる役の人数が限られた点である。生徒に机を後ろに下げさせて教室の半分くらいのスペースをとれば、各登場人物が東西南北に座る位置まで再現できるだろう。ちなみに剣は、手に持っているものと仮定して舞わせた。後日行った『平家物語』『能登殿最期』では授業者が持参した傘を太刀の代わりにしたが、剣舞をする今回は、傘が当たって怪我をしたらいけないと考え、何も持たせなかった。

2 演劇の効用

二つ目は、一人芝居と生徒個々に演じさせることを組み合わせた実践例である。「剣舞」の後の「樊噲 目を瞋らして項王を視る」の場面で、本文は「噲遂入、披帷西嚮立、瞋目視項王。…樊噲覆其盾於地、加彘肩上、拔劍、切而啗之。」である。

本文を解説する途中で、まず授業者が「目を瞋ら」す動作

をして「目^{もく}眚^し 尽く裂く」表情を見せた。その表情を生徒に真似させたところ、生徒達は面白がってお互いの顔真似を見比べ合っていた。さらに樊噲が「斗卮酒」を「立ちながらにして」飲み、盾をまな板にして剣で「生彘肩」を切って食べる動作を授業者が身振り手振りで演じたところ、生徒は「おー!」と盛り上がった。

今までの授業でも、この場面は文章で読ませるだけで生徒（特に男子）の興味をひいていたが、演じる要素を取り入れることでさらに反応が良くなったと感じている。今後は樊噲の動作を生徒にも演じさせてみたい。剣や盾、さらに「斗卮酒」を小道具で代用すれば一層の盛り上がりも期待できる。

3 他の単元との組み合わせ

三つ目は、「項王の最期」と他の単元とを組み合わせた実践例である。「鴻門の会」の四年後の話であるが、項羽のその後を読ませるのは、生徒にとって漢文への関心を高める一助になるだろう。本文は「乃自刎而死。」である。

授業の順序は、「項王の最期」が先で「能登殿最期」が後の学習になったのだが、共に自害の場面であるその姿をそれぞれ演じてみせた。それに関連させて、「能登殿最期」を読んだ後に、「項王の死に様とは違っているね」という指摘だけをした。残念ながら、配当時間に余裕がなく、双方を比較して

考えさせるところまではできなかったが、さらに「木曾の最期」などと読み比べをして、日本人と中国人との死に様の比較を考えさせることにも今後取り組んでみたい。

以上の三点を挙げたが、そもそも私がこのように演じることを授業に取り入れるきっかけを得たのは、教員一年目に研究授業をした際であったように思う。他教科のベテランの先生が授業後の感想で「説明で身振り手振りもあつたから、わかりやすくて良かったよ」と言ってくれた。それ以降、説明の際には口頭の言葉だけでなく身振り手振りを増やすよう意識し始めた。それが徐々に現在の演じるスタイルへとつながってきたのだろう。

参考までに今までの実践例を挙げると、寸劇は『宇治拾遺物語』『検非違使忠明のこと』や『平家物語』『能登殿最期』など、人形劇は「狐虎の威を借る」や「画竜点睛」、『万葉集』防人歌などで取り入れてきた。

普段の授業の中で、教材の本文を説明する際に、その内容に沿って授業者が演技をした方が説明しやすいという場面は多々あるだろう。そもそも教師は学校で「教師という役」と演じている。生徒達は誰しも将来の社会の中で与えられた役割を担うことになるが、その役割の中には演じる部分も出てくるであろう。教師が授業で演じる姿を見せる意義も、そういった将来への礎として考えてみるのも良いかもしれない。

教材としての「鴻門の会」―授業計画の工夫

まつい え
松家 滋

(東京都立国際高等学校)

古典Bの教科書には必ず採られている『史記』『項羽本紀』の「鴻門の会」。これほどおもしろい漢文教材もありたいと思うのだが、長文だからと敬遠してしまう方もいると聞く。また、どう扱ったらよいのかと悩んでいる方も多いようだ。『新人教師のための漢文指導入門講座』（塚田勝郎著・大修館書店）で、著者は「教える側がおもしろいと思えるまで教材研究を積み上げること」と言っているが、どうすればこの教材を「おもしろいと思える」ところまで行けるのか。そしてそのおもしろさをどうすれば伝えられるのか。ここでは読みの問題を取り上げて、そのことを考えてみようと思う。

どこを読んでおくべきか

現在、多くの教科書は「沛公旦日」の部分から「誅殺曹無傷」までを採録している。生徒に読ませるのはそこだけとしても、この部分だけの下調べで済ますことなく、できれば「項羽本紀」全篇には目を通しておきたい。これは現代語訳によつ

てもよい。たとえば漱石の『こころ』を授業で扱うとき、教科書の抄録の部分だけではなく、全篇を読むということは誰もがやっていることだろう。「項羽本紀」は『こころ』に比べたらずっと短い。小竹文夫・武夫の訳による『史記』（ちくま学芸文庫）では僅か四〇ページほどである。通読することでの会に至るまでの経緯、この会のと項羽はどうなつてゆくのか、沛公はどうかということも掴める。この鴻門の会がその後のふたりにとって、また中国の歴史にとって、どれだけ重要なできごとであったかが理解できるだろう。

時間がなくて無理だと言うなら、冒頭の若き日の項羽を描いた部分はぜひ。ここに見られる項羽の性格や行動は、あの部分の読解に大いに参考になる。これを「高祖本紀」に見られる若き日の沛公の描写と比較してみるのもおもしろい。

また、いくつかの会社の教科書には「楚軍行略定秦地」から「急撃勿失」までのくだりも取られているが、載っていない教科書を使っている場合でも、ここはぜひ生徒にも何らか

の形で読ませておきたい。一例として筆者が生徒に配布しているプリントを紹介しておこう（↓プリントA）。

二年漢文ノート

鴻門之会 其参

函谷関がふさがれているということは、あとから到着した軍勢が咸陽には入れないということである。当然にも項羽は怒り狂った。「沛公め、許せない！」。

楚軍行略定秦地、至函谷関。有兵守関、不得入。又、聞沛公已破咸陽、項羽大怒、使當陽君等擊関。項羽遂入、至于戲西。沛公軍霸上、未得与項羽相見。

（A）沛公左司馬曹無傷、使人言於項羽曰、

「沛公欲王関中、使子嬰為相、珍宝尽有之。」

項羽大怒、曰、

「旦日饗士卒。為擊破沛公軍。」

當時、項羽兵四十万、在新豐鴻門。沛公兵十万、在霸上。

（B）范增説項羽曰、

「沛公居山東時、食於財貨、好美姫。今入関、財物無所取、婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其氣、皆為龍虎、成五采。此天子氣也。急擊勿失。」

楚軍行くゆく秦の地を略定し、函谷関に至る。兵有りて関を守り、入るを得ず。又、沛公已に咸陽を破ると聞き、項羽大いに怒り、（ ）。

項羽遂に入り、戲西に至る。沛公霸上に軍し、未だ項羽と相見ゆるを得ず。

沛公の左司馬曹無傷、人をして項羽に言はしめて曰く、

「沛公関中に王たらんと欲し、子嬰をして相たらしめ、珍宝、盡く之を有つ」と。

項羽大いに怒りて、曰く、

「旦日士卒に饗せよ。沛公の軍を撃破することを為さんと。」

是の時に当たり、項羽の兵四十万、新豐の鴻門に在り。

沛公の兵十万、霸上に在り。

范增項羽に説きて曰く、

「沛公山東に居りし時、財貨を貪り、美姫を好めり。今関に入りて、財物取る所無く、婦女幸する所無し。此れ其の志小に在らず。吾れ人をして其の氣を望ましむるに、皆龍虎と為り、五采を成す。此天子の氣なり。急ぎ撃ちて失ふこと勿れ」と。

プリントA 曹無傷の密告

知り、沛公は咸陽の珍宝・婦女、秦帝国の富を独り占めする気かと思つて「大いに怒る」。そして曹無傷の密告Aによつてそれが現実のことと知り、「やはりそうか」とさらに「大いに怒る」。この項羽の怒りについては、武田泰淳の指摘がある（『司馬遷—史記の世界』）。

ところが范増はBのように、沛公は財貨・婦女に手を付けていない、だからこそ危険なのだ主張する。この項羽と范増の人間に対する洞察力の隔たりは大きい。これによつて鴻門の会の際のふたりのふるまひの違い、特に沛公からの贈り物を貰ったときの行動の違いも理解しやすくなると思う。

しかし矛盾するA・B、どちらの言い分が事実なのだろうか。司馬遷は『史記』を全体として読んでもらいたいと考えていたようである。宮崎市定は『史記を語る』の中で、紀伝体の特長を、「本紀が簡単に事件の終始を示すに止め、詳細な点は列伝其の他の関係箇所に分散して記述し、此等を彼れ此れ参照し、総合して始めて全体を把握し得る」ことに見ている。宮崎が続けて指摘するように「項羽本紀」などは「可なり立入った所までを記述し過ぎた観がある」のであるが。従つて、時間があるならば「高祖本紀」「留侯世家」「蕭相国世家」「陳丞相世家」「淮陰侯列伝」「樊鄴滕灌灌列伝」なども（これも現代語訳でもよいので）併せて読んでおきたいものだ。たとえば咸陽を占領したときの沛公のようすを知るには次

の部分が必要になる。

③遂に西して咸陽に入る。宮に止まりて休合せんと欲す。樊噲・張良諫む。乃ち秦の重宝・財物・府庫に封して、軍を霸上（高祖本紀）に還す。

④沛公秦宮に入る。宮室・帷帳・狗馬・重宝・婦女、千を以て数ふ。意之に留まり居らんと欲す。樊噲、沛公に出でて合せんことを諫む。沛公聴かず。良曰はく、「夫れ秦は無道を為し、故に沛公此に至るを得たり。夫れ天下の為に残賊を除かんには、宜しく縞素を資と為すべし。今始めて秦に入り、即ち其の楽しみに安んずるは、此れ所謂『桀を助けて虐を為す』なり。且つ、『忠言は耳に逆へども行ひに利あり、毒藥は口に苦けれども病に利あり』と。願はくは沛公樊噲の言を聴け。」と。沛公乃ち軍を霸上に還す。（留侯世家）
⑤沛公の咸陽に至るや、諸將皆争ひて金帛・財物も府に走りて之を分つ。（蕭相国世家）

⑥では、沛公は秦の宮殿に居座ろうとしたのを樊噲や張良に諫められ、宝物庫を封印して覇上に陣を敷いたとされる。家臣たちの意見を素直に受け入れる、さすがに沛公は立派だ、ということになるうか。しかし⑦を読むとどうか。沛公は宮殿の宝物・婦女に心を奪われ、樊噲が諫めても言うことを聞かない。そこで張良がことばを尽くして諫める。これでよう

やく沛公もあきらめる。沛公のしぶしぶといったようすを「乃」という一字が雄弁に表している。次いで⑧を見れば、秦の宮殿になだれ込んだ沛公の軍勢が、先を争つて掠奪を行つたさまも見てとれる。宝物庫の封印など、実はその掠奪のずっと後のことになるだろう。こうした「違い」を読むことが、「全体を把握」することにつながつてゆくわけだ。

これらを併せて考えると、④も⑤も、どちらも事実を伝えていることになる。沛公が家臣たちの意見を聞き、曹無傷に密告された行為をやめ、宮殿に居座らなかつたことが、結果として彼の運命を大きく左右することになったのだった。

本文ではこの後、総攻撃を翌朝に控えた夜、項羽の叔父の項伯が張良のもとにこつそりとやって来る場面が続く。ここには沛公がほんとうはどういう思惑で函谷関を塞いだのかが語られている。これは後の樊噲のセリフとも関わってくる。また、宴会の席でなぜ項伯が沛公をかばうのかも、ここを読むことで理解ができる。ぜひ目を通しておくとよい。

樊噲のセリフを読む

この「鴻門の会」を扱うのに、どのくらいの授業時数を掛けられるのだろうか。これは使っている教科書によっても違ってくるだろうし、また学校によっても、また生徒によっても違うだろうが、おおよそ六〇時間くらいだろうか。時間

数が少ない場合は、漢文で味わう部分と、現代語訳でおさえる部分とを分けてみてはどうだろう。書き下し文と現代語訳とを対照できるプリントなどを作ってみるのもよい。また、たとえば宴会の席次の部分などは、宮崎市定が「身振りと文学」で書くように、「項王は右手に項伯を従えてこのように東嚮して坐りましたぞ。亜父はこのように南嚮して坐りまする。亜父とは范増のことですぞ……」という「語りの調子」で読んでみてはどうだろう。そして漢文で取り組むことにした部分は、じっくりと時間をかけて読解をしてゆく。そうしためりはりを付けるのもひとつの方法である。

ここではその例として、ここまでのことを踏まえて、全篇のクライマックスともいえる樊噲のセリフを検討してみよう。樊噲のセリフに至るまでの描写にも、注意したい表現はいくつもある。紙面の都合で一点だけ示せば、項羽が樊噲に向けて「壯士」ということばを二度繰り返していることが挙げられる。この語は『漢書』のこの出来事を記した部分には全く見えず、『十八史略』では繰り返しが無い。しかしそう軽く考えていいことではないだろう。一度目の「壯士」は、闖入してきた無礼者である樊噲への皮肉をこめた物言いだと考えられる。ところが二度目の「壯士」には、樊噲の酒の飲みっぷりや、堂々とした態度を見た項羽の、「樊噲を気に入ってしまった」という気分が表されているのではないだろうか。

二年漢文ノート

鴻門之会 其陸

○樊噲のせりふについて

このせりふは沛公のために弁明をしつつ、項羽をやりこめるという二面性を持っているが、一方、実はかなりきわどい綱渡りを樊噲はしている。このせりふの構造を見てみよう。

「①臣死すら且つ避けず。

②卮酒安くんぞ辞するに足らんや。

③夫れ秦王虎狼の心有り。

④人を殺すこと挙ぐる能はざるがごとく、

⑤（

⑥天下皆之に叛く。

⑦懷王諸將と約して曰はく、

⑧『先に秦を破りて咸陽に入る者は、之に王たらしめん』と。

⑨今沛公先に秦を破り咸陽に入り、【A

⑩毫毛も取へて近づくる所有らず。宮室を封閉し、

⑪還りて霸上に軍し、以て大王の来るを待てり。

⑫故に（

⑬勞苦しくして功高きこと此くのごとし。――は、他盜の出入と非常とに備へしなり。

⑭（

⑮而るに細説を聴きて、（

⑯此れ亡秦の続のみ。【B

⑰窃かに大王の為に取らざるなり」と。

しかしその項羽の気持ちを突き放すようにして、樊噲は話し始める。プリントBをご覧いただきたい。

①②は項羽を突き放す物言い。③④⑤は⑥と呼応する。⑦⑧で懷王の約を口にし、⑨で沛公が先に咸陽にはいったことまでは言うものの、そのあとに続いてしかるべき「だから沛公が関中の王になるのは当然のことではないか。何が悪い」というセリフはない。これを言ってしまったら、項羽の怒りが再燃し、沛公たちは皆殺しの目に遭うことになるかもしれない。だからここは敢えて言うことをしない。しなくても、その場にいる誰もが、この樊噲の「言わなかったこと」に気付けばそれでいい。樊噲の雄弁なセリフであるが、ここでは言わなかったことこそが最も肝要な部分であるという構図になっている。

⑩⑪が事実かどうかについてはすでに検討を加えた。自分や張良が諫めたからこそ、この言い訳が使えたわけだから、樊噲は得意になってもおかしくない。しかしそんな気分にはひたる余裕など、むろんのこと樊噲にはなかった。次の⑫がもっともきわどい部分、つまりは全くの嘘だからだ。

秦の宝物・婦女を独占することへの疑惑がとりあえず晴れた後でも、⑫の事態に向けられた項羽の怒りは、他の多くの將兵たちにも共通した感情だったはずだ。沛公が函谷関を塞いだ経緯については、前に触れたように項伯が張良を訪れてきたときの場面に描かれている。そこで沛公は、ある人物（つまりぬ人物、とそこでは言われているのだが）の献策によって関中の地を独占するために関を塞いだのだと張良に明かし

ている。これは沛公にとっては、文字どおり致命的なミスだった。これが紛れもない事実なのだから、樊噲は必死の思いだったはずだ。ここを切り抜けられなければ、沛公の不安定な立場は解消されない（因みにこの部分は、前夜沛公が項伯に言ったセリフそのままである）。従って、ここから⑬⑭へは、きわどいジャンプと見るべきだろう。彼は巧みに話を逸らしているのだ。そして⑮で、それでは秦の二の舞になりますよと言う。「二の舞」が何を意味するか、これはもう口にする必要もなかったろう。そして最後に樊噲は⑯で「窃」という謙遜のことばを使って、あくまでもへりくだっている、という形をとって話を締めくくる。

このセリフが終わって、項羽が口にできたことばは、たったひと言、「坐」。「まあ座りなさい」だけだった。樊噲は見事に危機を乗り越えたのだった。

以上見てきたように、樊噲のセリフは怒りにまかせたものではない。これがいかに計算された、緻密なものであるかを考えれば、樊噲を武辺一辺倒の粗雑な人物とする（たとえばそういう映画がある）ことの誤りは明白だろう。

まだまだ指摘したいことは多い。「鴻門の会」、ひいては『史記』には生徒の興味をひく部分がたくさんある。毎年扱うたびに「続きを読みたい」という生徒の声を聞く。さらに読みを深め、広げて、そうした生徒の声にしっかりと応えていくための教材研究を続けていきたいものである。

「鴻門の会」理解のために

寺門日出男
(都留文科大学)

なぜ項羽は覇者になれたのか

紀元前二一〇年に始皇帝が没すると、各地で次々と反乱が起こり始めた。多数の反乱軍の中で、やがて項梁(項羽の叔父)・項羽の率いる軍団が次第に強大となり、前二〇六年、項羽が霸王を称するようになる。最終的には劉邦(沛公・漢の高祖)が天下を取るようになるが、一時的とはいえ、なぜ彼らの挙兵が成功したのか。それは、二人が楚国の出身であったことが大きな理由である。

楚は戦国の七雄(戦国時代に有力だった、秦・楚・斉・燕・趙・魏・韓の七国)の一つに数えられる国で、名君として名高い荘王(在位前六一三〜五九一)や、名将呉起(？〜前三八二)が活躍していた時期には、強大国であった。しかし、戦国時代後期になると、秦との戦争でたびたび敗れ、次第に国力が衰えていった。戦国末期に国君であった懷王(在位前三二八〜前二九九)は、盟約を結びたいと秦から持ちかけられて出向いていったところ、捕えられて咸陽に連行され、帰

国できずに病死する。秦のこうした卑劣なやり方に対し、楚の人々は強く憤った。そのため、「楚は三戸といえども、秦を亡ぼすは必ず楚ならん(戦争によって甚大な被害が出て、たとえ残り三戸になったとしても、秦を滅ぼすのは楚であろう)」と言われていた。

しかも、項氏は代々楚の將軍という名家であった。項梁の父・項燕は秦との戦争で命を落としている。項梁・項羽にとって、秦は祖国を滅ぼし、父(項羽にとっては祖父)を殺した不倶戴天の仇だった。彼らなら、あるいは秦を倒してくれるのではないかという期待が寄せられた。

なお、項羽が少年のころ、始皇帝の巡幸の行列を見て、「彼取りて代わるべきなり(あいつに取って代つてやろう)」と言って項梁を慌てさせている。このエピソードは項羽の気宇壮大さを象徴していると同時に、楚の名門の末裔として育てられ、幼少期から秦を憎むよう、項梁に教えられていたことをも窺わせる。

項梁は、范増の提案に従って楚王の末裔を探し出し、楚の懷王（秦に捕えられて非業の死を遂げた懷王と、あえて同名にしている）と称して擁立した。これによって項梁軍の大義名分が立ち、さらに多くの支持者を得られたのである。

劉邦の生い立ち

劉邦は、項羽とは対照的な人物である。沛^{はい}県（江蘇省北部の地名）の豊邑という村の農民出身と考えられる。そのため、極めて基本的な個人情報が、よくわからない。まず、元々の名前がわからない。邦（国という意味）という名は、王になった後にもつけたものであろう。通常、正史では、はじめに姓・名（諱）・字・出身地を挙げるのが一般的である。たとえば項羽本紀の冒頭には、「項籍（姓・名）は下相（出身地）の人なり。字は羽」と書かれている。一方、『史記』高祖本紀には、「高祖は沛の豊邑中陽里（出身地）の人なり。姓は劉氏。」としか書かれておらず、名も字も記されていない。続いて両親の名が、「父は太公と曰^いひ、母は劉媪^{りゅうおん}と曰ふ。」と書かれている。だが、太公は「おとつあん」、媪は「おつかさん」に相当する言葉で、固有名詞ではない。

年齢もよくわからない。項羽の場合、「初めて起ちし時、年二十四（はじめて挙兵した時二十四才）」と、項羽本紀に明記されている。したがって三年後の鴻門の会の時、二十七才

であったことがわかる。しかし、劉邦の場合、『史記』のどこにも、劉邦の年齢がわかる記述はない。ずっと後世になってから、鴻門の会の時点で五十一才であったとする説などが出てくるが、劉邦の死後四百年以上も後の学説で、何を根拠としているのかよくわからない。

要するに、劉邦は氏名・年齢ともに不詳であり、両親の名前さえわからない下層の出身だったのである。

関中を目指して

前二〇八年、項梁は定陶^{ていとう}の戦いで秦の將軍・章^{しやう}邯^{かた}に敗れて戦死する。その後、軍団の中で次第に頭角を現してきたのが、項羽と劉邦であった。懷王はそれぞれの軍団を率いる將軍たちと「先づ入りて関中を定むる者は之に王とせん（真つ先に関中の地を平定したものを、その地の王としよう）」と約束し、諸將たちはそれぞれ関中の地を目指すことになる。

ここで、関中およびその東の入り口に位置する函谷関^{かんこくかん}について説明しておこう。関中とは、現在の陝西省^{せんせいせい}の渭水盆地^{ゐすい}一帯の呼称である。北に北山、南に秦嶺^{しんれい}山脈、西に隴山^{ろうざん}、東に黄河という天然の要害に囲まれた広大な盆地である。この盆地への入り口として、東に函谷関、西に隴関、大散関、北に蕭関、南に武関といった関所が置かれていて、これらの関所に囲まれていることから、関中と呼ばれる。

中でも函谷関は東の中原（黄河文明発祥の地）と関中とを結ぶ要衝で、数キロメートルにわたってU字状に深くえぐれた狭い道が続き、まるで函の中を行くようであることから、この名がついている。この関所は守るに易く攻めるに難く、数百人程度の守備兵を配置しておけば、大軍が攻めてきても容易に突破できない。

しかも、当時の渭水盆地は農業生産高が大きく、各関所を閉ざして長期間籠城しても、食糧不足になることがなかった。西周、秦、漢、隋、唐など歴代の王朝が関中に都を置いたのは、こうした特長による。

項羽と劉邦も関中の重要性については知っていたはずである。懷王の「先づ入りて関中を定むる者は之に王とせん」という言葉を耳にした時、まずは関中の王となり、やがて中国全土を支配する皇帝になるという想像が、脳裏に浮かんだに違いない。

項羽の敗因

なぜ項羽は天下を取れなかったのか。以下の三点が主な理由として考えられる。

まず、関中に一番乗りできなかったことが挙げられる。項羽が函谷関を目指して手間取ったのに対し、劉邦は南の武關を経由し、頑強な抵抗を受けなかったため、項羽より二か月

も早く関中に入ることができた。諸將達との約束に従えば、断然劉邦に分がある。

次に、鴻門の会で劉邦を殺さなかったことである。その原因として、二人の年齢差が考えられる。当時、項羽は二十七才、劉邦（沛公）は、通説に従えば五十一才であった。平均寿命が男女ともに八十才を越える現代では、五十代は働き盛りの年齢であるが、古代中国では老人と考えられていた。項羽としても、この時点で自分の地位を脅かす可能性があったのは劉邦だけで、殺してしまうのが一番確実であった。しかし、親子ほども年の離れた老人が、わざわざ出向いてきて謝罪したため、決意が鈍ってしまったのである。

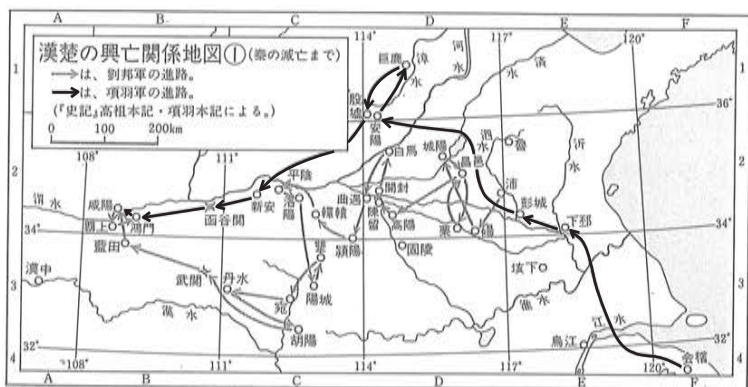
第三に、敵や民衆への対処の違いがある。項羽は降伏した秦の兵二十余万人を坑埋めにし、咸陽を手中にすると略奪・放火し、さらには義帝（懷王）を暗殺するなど、残虐・非道な行為を繰り返した。対して劉邦は、降伏してきた秦王・子嬰を殺さず、民衆に対しては「法三章（殺人・傷害・盗みだけを処罰し、それ以外の法はすべて撤廃する）」を約束するなど、寛容な態度をアピールした。このため、人心が次第に劉邦へと傾いていったのである。

『鴻門の会』は、『史記』屈指の名場面として読み継がれてきた。以上述べてきたことをふまえ、その魅力を味わってほしい。

「鴻門の会」 関連年表

※当時の暦では、十月に年が始まり九月に終わる。

		西暦		月	記事
		周赧王	前二五九		劉邦、生まれる。(一説に前二四七年)
		秦王政	前三三		項羽、生まれる。
		始皇帝	前三三		秦、天下を統一する。
		二世胡亥	前二〇		始皇帝崩ず。趙高、李斯と謀り、胡亥を二世皇帝に立てる。
37	前二〇			9	陳勝・呉広の乱、起こる。
2	前二六			12	項梁、項羽と共に挙兵する。劉邦、挙兵する。
3	前二七			9	項梁、楚の懷王を立てる。
				6	項梁、秦の章邯に敗れて死に、代わって宋義が軍を統率する。
				4	項羽、宋義を殺して自ら上將軍となる。
				7	章邯、項羽に降伏する。
				8	趙高、胡亥を殺して子嬰(胡亥の甥)を三世の王に立てる。
				7	子嬰、趙高を殺す。
					劉邦、藍田で秦軍を破る。
高祖	1	前二〇六		11	劉邦、霸上に至り、子嬰、降伏する。
				10	劉邦、関中で法三章を約束する。
					項羽、降伏した秦の兵士二十余万人を坑埋めにする。
					鴻門の会。項羽、咸陽に入り、子嬰を殺し、宮殿を焼き尽くす。
					項羽、懷王を立てて義帝とする。
					項羽、西楚の霸王と称し、劉邦を漢中王とする。
2	前二〇五			10	項羽、義帝を暗殺。
5	前二〇三			2	垓下の戦い。項羽、烏江で自刎。
					劉邦、皇帝となる。



『史記の事典』(大修館書店刊、2002)より

登場人物を知るために

てらふかひで お
寺門日出男
(都留文科大学)

秦

【始皇帝】在位、前二四七―前二一〇。姓は嬴、名は政。宰相に李斯を用いて富国強兵につとめ、前二二一年に天下を統一。従来、中国では元首だけが王と称していたが、周王朝の權威が失墜すると諸侯が勝手に王と称していた。そこで政は新たに皇帝の称号を考案し、はじめての皇帝という意味で自ら始皇帝と称した。壮麗な宮殿や長城を築き、思想弾圧（焚書坑儒）を行う一方、度量衡や文字の書体等を統一（いずれも戦国時代には国ごとに異なる）した。また、封建制（諸侯に各自の領地を治めさせる方式）を郡県制（役人を各地に派遣して統治させる方式）に改め、現在の中国に匹敵する広大な帝国を建設した。紀元前二一〇年、巡幸の途中で病没した。

【秦始皇本紀】

【胡亥】在位、前二〇九―前二〇七。始皇帝の末子。始皇帝没後、宦官趙高と丞相李斯の策謀で二世皇帝となるが、大規模な土木工事と軍事動員で民を苦しめ、陳勝の乱を招く。最期は趙高によって自殺に追い込まれた。

【子嬰】在位、前二〇七―前二〇六。始皇帝の孫。即位後直ちに趙高を殺し、覇上に進攻してきた沛公に降伏する。後に、咸陽に攻め入った項羽によって殺された。

【秦始皇本紀】

【秦始皇本紀】

楚

【懷王】在位、前二二八―前二九九。戦国時代末の楚の国君。張儀などの遊説家に翻弄され、斉・秦との戦争に負け続けた。最

期は秦の謀略によって捕えられ、咸陽で病没した。

【楚世家】

【懷王心】？―前二〇五。懷王の孫。楚国が亡んだ後に羊飼いをしていたのを項梁が探し出し、民心を得る目的であえて懷王と号して擁立した。秦滅亡後は義帝に立てられるが、次第に項羽にとって邪魔な存在となり、暗殺される。

【項羽本紀】

【項梁】？―前二〇八。楚の將軍項燕の子。項羽の季父（一番年下の叔父）。陳勝の乱に際して項羽とともに挙兵し、楚軍を統率した。秦の將軍章邯と、定陶に戦って敗死した。

【項羽本紀】

【項羽】前二三一―前二〇二。名は籍、字は子羽。叔父の項梁に育てられる。身長が約二メートルもあり、鼎（青銅製の大きな器。通常は二人以上で運ぶ）を一人で持ち上げるなど体格に恵まれ、才気（才能と気迫）も人並優れていた。二十四歳のとき、項梁とともに挙兵する。鴻門の会の後は沛公を漢中の地に封じて遠ざけ、自らは西楚の霸王と号して天下制覇の偉業を成し遂げた。しかし、人望の点で問題があり、陳平（策略家）・韓信（「背水の陣」の故事で有名な知将）・英布等、優秀な人材が次々と漢王の陣営に移り、ついに垓下の戦いで漢王に敗

れ、烏江で自刎した。

【項羽本紀】

【項伯】？―前一九二。名は繆、字は伯。項羽の季父。「伯」という字は長男につけられるものなのに、なぜつけられたのか不明。また、項羽の季父が二人（項梁・項伯）居るものもおかしいが、これもよく分からない。かつて人を殺し、それを張良に救われた恩義がある。鴻門の会前夜、張良を助けようとした沛公の陣に赴き、沛公とも会見して項羽に謝罪するようになりなした。漢王（沛公）の父親が項羽に囚われて煮殺されそうになったときも、説得して思いどまらせた。漢王朝成立後、劉姓を賜り、射陽侯に封ぜられた。

【項羽本紀】

【項莊】登場するのは「鴻門の会」の場面のみで、経歴は不明。項羽の従弟（年下のいとこ）。

【項羽本紀】

【范増】？―前二〇四。齢七十にして項梁と項羽に仕えた謀臣。居鄆（安徽省巢湖市）の人。楚の軍中では「亜父」（父に準いて尊敬する人と呼ばれた。鴻門の会の後、陳平の策略によって項羽に疑われ、項羽のものとを去る。郷里に戻る途中、背中に悪性の腫れ物ができて病没した。

【項羽本紀】

【英布】？―前一九五。罪を犯して黥の刑に処せられたことから黥布とも呼ばれる。

陵墓造営の懲役に服していたが、陳勝の乱のとき決起し、やがて項梁軍に属し、項羽の将となって九江王に封ぜられた。後に、項羽に背いて漢に帰属し、淮南王に封ぜられたが、叛いて敗死した。

【黥布列伝】

【陳平】？―前一七八。項羽に帰属して関中に入り、秦を滅ぼした。鴻門の会るときは都尉（軍事を担当する地方官）であった。後、逃亡して漢に降り、項羽と范増の仲を割く策を献じるなど、漢王の功臣として活躍した。

【陳丞相世家】

漢

【劉邦】在位、前二〇六―前一九五。漢の初代の皇帝。姓は劉、名は邦、字は季。反乱軍を率いると、沛県出身にちなんで沛公と呼ばれた。楚の懷王の傘下に入り、項梁・項羽とともに秦の打倒を計ったが、項梁没後は袂を分かち、先に咸陽入城を果たす。降伏してきた秦王子嬰を殺さず、民と法三章（殺人・傷害・盗みだけを罰し、他の法は全て廃止する）を約束して人心を掌握した。鴻門の会で死地を脱した後は、項羽に憎まれ漢中（陝西省南部の僻地）に封ぜ

られた。以後、漢王と呼ばれる。その後次第に勢力を増し、ついに垓下の戦いで項羽を破り、天下を統一した。前二〇二年、正式に皇帝の位に即く。英布討伐の際に受けた矢傷が悪化し、病没した。

【高祖本紀】

【張良】？―前一八九。沛公の参謀。字は子房。戦国時代・韓の宰相家の出。始皇帝暗殺に失敗して逃亡中、太公望（周の文王に仕えた軍事の天才）の兵法書を授かったと伝えられる。陳勝の乱の際、沛公の配下に加わる。鴻門の会以外でも度々沛公の危機を救い、漢王朝創設に絶大な貢献をした。

【項羽本紀】

【樊噲】？―前一八九。沛公の臣。沛公と同郷の出身で、若い頃から行動をとともにしていた。戦場では常に先陣を切って戦い、目覚ましい戦果を挙げた。鴻門の会では、宴席に押し入って沛公を窮地から救った。沛公の妻の妹をめとり、最も親しまれた。

【樊噲列伝】

【曹無傷】？―前二〇五。沛公の左司馬（將軍に次ぐ高官）。鴻門の会前夜、項羽に取り入るため沛公を中傷したが、そのことを項羽が包み隠さずに告げたため、沛公に殺された。

【高祖本紀】

【項羽本紀】

【授業実践】 I T 機器を活用した「鴻門の会」

肥田博之^{ひだひろゆき}

(千葉県立千葉東高等学校)

はじめに

私の人生を方向づけたのは高等学校の漢文の授業だった。特に司馬遷『史記』『鴻門の会』『四面楚歌』の感動は、今なお鮮明に記憶している。とにかく夢中になって教師の話を聞いた。怠惰な高校生だった私にとって、ここまで教材に引き込まれるのは初めての体験だった。これが契機となって大学で中国古代文学を専攻し、浅学ながら教壇に立つ夢を叶えた。そして、漢文の学びの面白さを伝授したいという意欲に燃えた。

しかし残念ながら、生徒が漢文学習に意欲的に取り組む様子には、ほとんど出会えない。初任校では「左右皆寝て、能く仰ぎ視るもの莫し^な」といった惨状にも陥った。「愚や、愚や、若を奈何せん^{なんぢ いかに}。」と悲嘆したが、居眠りする生徒諸子は小愚に過ぎず、斯くのごとき授業を展開する教師こそが大愚なのである。己を恥じた私は、漢文の面白さを理解させ、学ぶ意欲を高める方策は無いものかと思案した。そこで着目

したのが、I T 機器の活用である。

初任校では職業科の高校に勤務していたが、情報技術に長けた先生方が多く、プロジェクトとスクリーンを用いて授業を行い、プレゼンテーションソフトを活用して説明を行う取り組みが実践されていた。この手法を漢文の授業に活かせば、本文や書き下し文、現代語訳などを瞬時に映写できる。また、本文の解説と合わせて、時代背景や地理などについて視覚的に示すことができる。また、板書の時間を削減できるため、授業内に補足的な情報を挿入しながら、言語活動を展開する時間も確保でき、それによって生徒の漢文に対する興味・関心を喚起できると考えた。

そして、前任校で担当した「国語総合」から、I T 機器を活用した漢文の授業を開始した。マイクロソフト社のパワーポイントを使い、訓読の説明にアニメーションを用いるなどの工夫を試みた。その結果、学年末の授業評価アンケートでは、「プレゼン用ソフトの活用は漢文を読むことに役立った」

と回答した生徒が八十七％に達し、漢文に対する興味の高揚にも一定の成果を得た。この取り組みについては、拙論「漢文を読む意欲を高める授業展開の研究」(<http://www.chiba-c.ed.jp/shidou/k-kenkyu/h24.htm>)をお読みいただければ恐悦至極である。

Ⅰ 「鴻門の会」の授業におけるIT機器の活用例

平成二十五年度に現任校に赴任した際、私は生徒に「授業・完全地デジ化」を宣言し、爾来、漢文に限らず、ほぼすべての授業をプレゼン用ソフトを用いて展開している。教師になってから今日まで、担当学年や科目の関係で「鴻門の会」を教える機会に恵まれなかった。しかし今年度、二年生の古典Bを受け持つことになり、ついに「鴻門の会」を授業する時機を得た。そこでIT機器の活用法を中心とした授業のアイデアを中心に、雑駁ながら思いついたことをお伝えしたい。

○「鴻門の会」・単元の目標

ア 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察する。(関心・意欲・態度)
イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して適確にとらえる。(読む能力)

ウ 古典に用いられている語句の意味、用法について理解

― する。(知識・理解)

このイ・ウの目標のために、次のようなIT機器の活用方法が考えられる。

Ⅰ 本文の読解

現任校の漢文の授業では、予習としてノートに本文を写し、訓読と現代語訳を行うことを生徒に課しており、その解説にプレゼンソフトを活用している。資料①はその際に映写するスライドである。これは一括して写すのではなく、本文↓本文に付加する説明↓書き下し文↓語釈↓現代語訳の順に説明しながら表示している。発問と解答・解説も同様の過程で展開する。

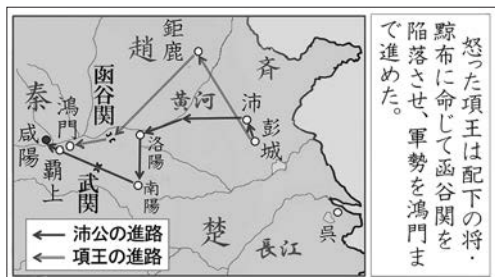
なお、黒板に貼りつけるマグネット・スクリーンを使用しているため、生徒の発言内容等を、その左右に板書することが可能である。

使役の助字 使・俾・令・教・遣	今者、有小人之言、 使役 令 將軍 与 臣 有 卻。 今者、小人の言有り、 將軍をして臣と卻有ら しむ。」と。 ・今者…いま ※昔者…むかし 古者…いにしへ ・小人…つもらぬ者 今、つもらぬ者の中傷があり、 將軍に私と仲たがひさせよう としています。」と。
----------------------------	---

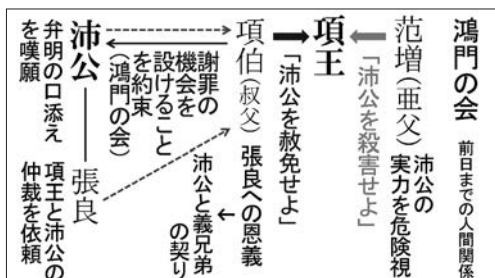
資料① 本文読解のためのスライド

Ⅱ 作品の背景に関する補足説明

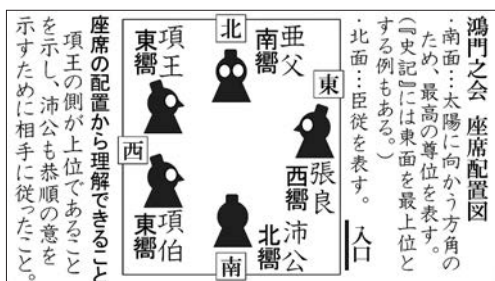
「鴻門の会」に至るまでのエピソードをいくつか紹介し、生徒の理解を深めさせたい。具体的には『史記』項羽本紀から、函谷関を閉ざされた項王が激怒して攻撃を命じたこと、范増が沛公の「天子の氣」を知り危機感を覚えたこと、項王の武力を恐れた沛公が項伯に仲裁を懇願したことなどを授業で扱う予定である。資料②はそのためのスライドである。説明と『史記』の書き下し文・現代語訳を交えて、解説が単調



資料② 補足事項の図示と説明



資料③ 補足説明のまとめ
(人間関係を中心に)



資料④ 記述内容の図示
(鴻門の会・座席配置図)

にならないように工夫している。また、地図上の矢印はアニメーション効果で進行方向に向かって伸びるしかげになっていく。これは『論語』や「臥薪嘗胆」の授業でも、人物の移動や国同士の関係を示す際に用いたが、多くの生徒から「わかりやすい」という評価を得ている。なお、生徒にはこれらのスライドの内容をプリントにして配付する予定だ。

Ⅲ 補足説明のまとめ
授業評価アンケートから、少なからぬ生徒が漢文の登場人

物の識別に苦手意識を持っていることがわかつている。また、「鴻門の会」初読の生徒には、項王の叔父である項伯が身を挺して沛公を守護する理由を不明瞭に感じる者もいるだろう。そこで資料③のような形でⅡの補足事項をまとめ、ノートに写させる。なお、この画面でも説明や矢印にアニメーションで動きを付加している。

Ⅳ 記述内容の図示

「鴻門の会」の座席位置を問い、考えさせることは本文の精読を促すとともに、「北面」の概念など、中国と我が国との文化の関係を理解させる契機となる。資料④はそれを確認させるためのスライドである。また、こういった画面上で人物をアニメーションで動かすと生徒からは歓声が挙がる。授業の本筋とは無縁の余興だが、漢文に親しみを持たせることの一助にはなるう。

2 IT機器活用の利点

以上のⅠ～Ⅳは、いずれも板書やプリントで実践できることである。そのため、次のような疑問をお持ちになる方もいらっしゃるだろう。スライドを作りには時間がかかる。アニメーション効果を入れればなおさらである。また、毎回、教室にパソコン、プロジェクター、スクリーンを持ち込み、セッティングするのも煩雑な作業である。冒頭で説明された

IT機器活用の効能は理解できるが、それに見合う学習効果は与えられるのか、と。

実のところ、これは自問でもある。だが、プレゼン用ソフトの活用でⅠ～Ⅳが統合され、授業展開を円滑化できる。また、プリントを用いての説明では生徒がうつむいて話を聞くことになるが、画面を見せる形をとると全員が顔を上げることになる。これらがクラス全体の集中力を高めることを、授業を通して実感しており、IT機器活用の利点として特筆できると認識している。

3 言語活動と今後の課題

本文の読解後、単元の目標・アのために言語活動を行い、評価する。具体的にはクラスを四つの班に分けて書き下し文の群読を行うことと、「四面楚歌」の学習後に、一学年で学んだ『平家物語』『木曾の最期』と比較して考えたことを記述させる学習活動を計画している。

なお、今回は教師の道具としてIT機器を活用しているが、これを言語活動に利用することも試みられるべきである。例えばプレゼン用ソフトを生徒の発表に活用したり、情報端末から意見を送信させてリアルタイムで表示し、相互評価させたりするなどの利用が考えられる。今後も、生徒の主体性を発揮させる授業の実践に取り組みたいと考えている。

●特集Ⅱ「鴻門の会」の授業づくり

「鴻門の会」に取り組む
先生のためのブックガイド

■『史記』本文を読むには

- 吉田賢抗・水沢利忠・青木五郎・寺門日出男他『史記』（新釈漢文大系全15巻）明治書院 一九三～二〇一四
- 田中謙二・一海知義『史記』上・中・下（朝日選書）朝日新聞社 一九六六
- 小竹文夫・小竹武夫『史記』一～七（ちくま学芸文庫）筑摩書房 一九五五
- 寺門日出男・吉原英夫『歴史Ⅰ 史記』（研究資料漢文学7）明治書院 一九四四
- 大竹修一・土屋泰男『漢文名作選2 歴史』大修館書店 一九六四
- 若林力・高野由紀夫『漢文名作選第2集 2 英傑の群像』大修館書店 一九九六
- 『史記』の世界を知るには
- 青木五郎・中村嘉弘『史記の事典』大修館書店 二〇〇一

○渡辺精一『図説 地図とあらずじでわかる！ 史記』（青春新書 INTELLIGENCE）青春出版社 二〇〇九

○益満義裕・山口直樹『図説「史記」の世界』（ふくろうの本）河出書房新社 二〇〇七

○増井経夫『史記の世界』（NHKブックス）NHK出版 一九七

○宮城谷昌光『史記の風景』（新潮文庫）新潮社 二〇〇〇

○渡辺精一『ビジュアル版 史記物語』講談社 二〇〇一

○村山吉廣『故事ことわざで読む史記』小学館 一九八

○大木康『現代語訳史記』（ちくま新書）筑摩書房 二〇一

■登場人物について知るには

○『項羽と劉邦』上・下（歴史群像シリーズ）学習研究社 一九九三

○吉川忠夫『秦の始皇帝』（講談社学術文庫）講談社 二〇〇一

○渡部昇一・小室直樹他『史記の人間学』上・下 プレジデント社 一九九七

■司馬遷について知るには

○武田泰淳『司馬遷—史記の世界』（講談社文芸文庫）講談社 一九九七

○林田慎之助『司馬遷』（集英社文庫）集英社 一九九

○藤田勝久『司馬遷とその時代』（東洋叢書）東京大学出版会 二〇〇一

■フィクションで楽しむ『史記』

○司馬遼太郎『項羽と劉邦』上・中・下（新潮文庫）新潮社 一九八四

○陳舜臣『ものがたり史記』（朝日文庫）朝日新聞社 一九八三

○横山光輝『項羽と劉邦』（潮漫画文庫全12巻）潮出版社 二〇〇一

○蔡志忠（松岡榮志監修・古谷秀訳）『マンガ 史記・戦国の世界』凱風社 一九九五

■さらに極めたい人に

○貝塚茂樹『史記』（中公新書）中央公論新社 一九六三

○宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫）岩波書店 一九九六

（編集部）

センター試験・漢文に問われたエトス

有^{あり}木^き大^{だい}輔^{すけ}

(筑波大学附属駒場中・高等学校)

入試問題作成の舞台裏

やや古い話になるが、二〇一四年のセンター試験国語の全国平均は一〇〇・八点と例年を大きく下回ったことは衝撃的な「事件」であった。とりわけ漢文は五〇点中二〇・八点と半分以下にまで落ち込み、漢文は点を取りやすい科目とタカを括っていた受験生は大いに落胆しただろう。筆者も昨年度の授業の中で、しばしばこの試験問題を話題に取り上げたほどであった。

この年の問題は、明・陸樹声^{りくじゅせい}の「苦竹記」(『陸文定公集』巻十二所収)という小品文である。美味^{うまい}しいタケノコは早くに食べられてしまうが、苦いタケノコはむしろその生を全うできることの対比から、莊子の「無用の用」に繋がる考え方を説いた文章である。この「苦竹記」は民国後に排印(活版)で出版された『晚明二十家小品』に採録されているものの、四庫全書や四部叢刊のような叢書類には一切収録されていない。しかも試験問題に出品として明記されている『陸文定公集』さえも、漢籍データベースによると尊経閣文庫にのみ存在する稀覯書である。尊経閣文庫と

は、加賀藩五代当主前田綱紀の蔵書を中心とした前田家のコレクションである。幸いにも筆者の勤務校はここから大学入試センターを間に挟んだ徒歩圏内にある。ここを管理する財団の方によると、最近当該箇所の閲覧を希望される方が増えたらしく、おそらく問題作成者も大学入試センターを抜け出してここを訪ねたに違いない。センター試験にこのようにマイナーな文章が出ることはやむを得ず、むしろ出題者が作品選定に苦心した痕跡が見られる。さすがに高校生の立場では尊経閣文庫の漢籍を閲覧することは難しいが、本校ではこの隣にある大学を目指す生徒も多く、生徒にとって非常に身近に感じられる場所である。いずれはこの文献を閲覧するという貴重な体験を味わいたいと思う生徒が一人でも増えることを期待したい。

「斬」の解釈に対する私見

設問に目を向けてみよう。問2は傍線部「好事者目以清嗜不斬方長。」に最も適当な返り点の付け方とその読み方を選ぶ問題で

ある。正答は選択肢⑤の「事を好む者目するに清嗜^{せいし}を以てし方^{まさ}に長ずるを斬らず」であるが、ここで各予備校より出版された過去問集の傍線部の訳を列挙する。

・珍しいものを好む者は(荀のごとく)清雅なものに目を向け
て大きくなくなってしまったものは採らない。 (旺文社)

・好事家(ここではタケノコを好物とする人)は清らかな味わい
を好んで(柔らかなタケノコに)目を配り、今や長く伸びた
ものは採らない。 (教学社)

・好事家は(タケノコを食べることを)清雅なものへの嗜好(の
一つ)と見なし、ちょうど成長してしまった(おいしくない)
タケノコを取らない。 (河合塾)

・ものずきな人は清雅なものへの嗜好という点から見て、大き
くなりかかったタケノコは採らない。 (東進)

・珍しいものの好きは、清雅なものへの嗜好から、大きくなった
タケノコを取ろうとしない。 (代ゼミ)

・風流を好む人は(荀を食べることを)清雅な嗜好とみなし、
(荀が)今まさに成長しているのを惜しまない(で掘り取る)。

(駿台)

金文京氏が指摘しているように、「斬」は「とる」ではなく
「をしむ」と訓み、「生長するのを惜しまずに採ってしまう」と訳
さなければその後の「故雖園林豊美、複垣重扇、主人居嘗愛護、
及其甘於食之也、剪伐不顧。(そのため、庭園に幾重もの垣根や門
扉をしつらえて、主人が常に(竹林を)大事にしていっても、食べ頃に

なると構わずに伐採してしまう)」と文意が繋がらない。ここでは
駿台が解説の中に「この文字は「をしむ」と訓じて、文字通り
「惜しむ・哀惜する」の意を表すのが普通である」と説明を添え
て金氏と同じ立場をとる。しかしここでは出題者が「斬らず」と
訓読したことを反映させて解釈する必要がある。

本文中に「タケノコを採取する」の意味に用いられる漢字は、
「採食」(二行目)、「剪伐」(四行目、七行目)、「収」(五行目)、
「取」(六行目、八行目)が挙げられるが、ここでわざわざ難解な
「斬」を用いてまで「採取する」の意味にすべきであろうか。『大
漢和辞典』に「とる」の訓があるのは『小爾雅』「斬、取也。」に
拠っている。しかし『大漢和辞典』は他にも『説文通訓定声』を
挙げ、「攢・掀に通ず。」とある。ここで更に「攢」と「掀」の字
を引いてみると、「攢」は「ひろふ」(『漢書』刑法志「蕭何攢掀秦
法、取其宜於時者、作律九章。」、)、「掀」は「かかげる、あげる」
(『説文』「掀、挙出也。）」とある。つまり、ここでの「とる」とは
「採取する」の意味ではなく、「意見や選択を」すくい上げる、採
用する」の意味に取るべきである。すなわち、「まさに生長する
(タケノコ)をとらない」ではなく、「まさに生長する(という選
択)をとらない」と訳せば、設問の訓読でも無理は生じない。た
だし、限られた時間内に問題を解かなければならない受験生には
前者の意味で取ってしまう恐れが大いにあるため、金氏の指摘
するように「斬します」と訓読して「(タケノコが)生長すること
を惜しまない」と解釈させるのが適切であろう。同年の現代文の

問題として出題された齋藤希史『漢文脈と近代日本』の表現を引用すれば、これこそまさしく「解釈の標準が定まっていな」と、訓読もまちまちになってしま」つている事例である。

文法丸暗記型授業への戒め

問7「豈^あ莊子所謂^い以無用^い為用者比耶。」の読み方と筆者の主張を選ぶ問題も非常に印象的な設問であった。「豈」を反語に訳した選択肢④「豈に莊子の所謂無用を以て用を為す者をば比べんや」を選んだ受験生が多いと聞く。確かに正答の選択肢⑤「豈に莊子の所謂無用を以て用と為す者の比ひなるか」のように「豈」を詠嘆とする表現はめったに使うものではない。高校の教員も、少なくとも漢文の授業時数の中で如何に効率良く文法を教えるかに苦心するあまり、つい「豈」反語」と型に嵌めた教え方をしているまいだろうか。これは文法丸暗記型の教育に対する出題者からの戒めと捉えたい。

したがって、この設問は文法ではなく内容把握に重きを置いた問題とみるべきであろう。ここでの出題者の意図は、莊子の「無用の用」に対する理解にある。問題文には「無用の用」についての説明は一切無いが、出題者は、受験生が「知の世界の住人であればこそ、無為自然を説」(前述『漢文脈と近代日本』)しているのである。「無用の用」の考え方については、ほとんどの教科書に「言、大而無用」(『莊子』人間世篇)か「無用之用」(『老子』第十一章)が採録されている。他にも「曳尾於塗中」(『莊子』秋水

篇)や「此必苦李」(『世説新語』雅量篇)などからもこの考え方は推測できるため、高校生ならば一度は触れているはずである。さすれば選択肢④「無用のようにみえるものこそ役に立つという『莊子』の考え方が見失われがちなことを嘆いている。」という選択肢に違和感を持つはずである。筆者は、この問題を通して中国思想の基礎を理解することの必要性を生徒に説いている。

大学入試が受験生に求めるもの

今後センター試験が廃止され、二〇二〇年度より新たな学力調査が導入されるという。選択肢から正答を選ぶマーク式の試験が長らく続いたため、出題者は誤答を作ることには苦慮する反面、問題文を読まずに選択肢だけで正解にたどり着く「ウラ技」まで出現し、センター試験はもはや真の学力を量るものではないという議論もある。しかしこの年の漢文の問題には、受験生へ向けて「士人的エトスもしくは士人意識への志向」(前述『漢文脈と近代日本』)が用意されていると言えよう。

注(1) 他にも国会図書館関西館にはマイクロフィルムが、京大人文研には影印が存在する。

(2) 金文京「昨年度センター試験「漢文」問題についての疑問」(東方書店『東方』四〇八号二〇一五年二月)



大修館書店
ホームページ別館

「漢字文化資料館」全面リニューアル・オープン！

漢字Q&A

漢字に関するさまざまな疑問にお答えします！ 待望の再開第一弾は「子どもの名前に使える漢字はどのような読み方をしてよいのでしょうか？」、第二弾は「『巫女』の『巫』が人名用漢字になりました。名前でこの字を使う場合、どのような読み方ができるのでしょうか。」と、身近な「名前の漢字と読み」についてのQ&Aです。

漢字文化アーカイブ

授業プリントにも使える訓点付きの『十八史略』原文（『三国志』より髀肉の嘆、三顧の礼、赤壁の戦い、呉下の阿蒙、劉備の死、出師の表、死せる諸葛生ける仲達を走らす、泣いて馬謖を斬る）、『三字経』注釈などが、無料でダウンロードしていただけます。

めます。不思議な形の漢字や、知っているようでどこか一画が違う漢字などなど……。どんな意味か予測しながらご覧ください。毎日の朝礼や授業の導入に取り入れれば、生徒たちの漢字に対する興味も広がります。



今日の大漢和

『大漢和辞典』から毎日一字を選んでトップページに掲載。クリックすれば語釈も読



魅惑の漢字ワールドへようこそ!

連載記事

●『漢文教室』クラシックス

第一弾の諸橋轍次「漢学界の回顧 十一（口述）」(『漢文教室』一九号—一九五五年六月発行「掲載」)をはじめ、本邦中国学の泰斗による名論考の数々を再掲し、漢文教育研究のあゆみを振り返ります。

●写真でたどる

『大漢和辞典』編纂史

世界最大の漢和辞典『大漢和辞典』の歴史を、写真やゆかりの品々を通して紹介。『大漢和辞典』の元担当者による、当時の時代背景にまで及ぶ緻密な調査で浮かび上がる、大辞典誕生のドラマをお楽しみください。

●体感! 痛感? 中国文化

編集者として雑誌『しにか』や「あじあブックス」シリーズの創刊に携わり、日本語教師として北京で日本語・日本文化を教えた著者の、肌で感じた中国文化エッセイ。

●サンキュータツオの

細かさぎる国語辞典の読み方

辞書芸人サンキュータツオさんがあぶり出す、国語辞典に詰め込まれた細かな工夫には、著者や編集委員の苦心の跡が…。

特別記事

●異能の人、辞書を読む。

『新漢語林 第二版』

刊行記念インタビュー

ビジュアル記事や対談などを掲載する「特別記事」第一弾は、小社PR誌「辞書のほん」三号に掲載された、鳥居みゆきさんのインタビュー。

『閉所恐怖症だから「く」がまえ』は中に入っちゃったら大変だけれど、「はこがまえ」だったら隙間が空いているからいける」など、一風変わった彼女の感性は、『漢字』に対する新しい見方を教えてくれることでしょう。

第二弾は『大漢和』を独特の観点から読

連載記事一覧

写真でたどる『大漢和辞典』編纂史

漢文字5万語、熟語50万語を収録する最大の漢和辞典、『大漢和辞典』の歴史を、写真や『大漢和』ゆかりの品々を通して紹介します。



サンキュータツオの細かさぎる国語辞典の読み方

New

語彙や収録語に細かさがちな国語辞典にも、実はページのいたるところに細かな工夫が詰め込まれています。そんな著者と編集委員の苦心の跡を、辞書芸人サンキュータツオさんがあぶり出します!



『漢文教室』クラシックス

New

国内唯一の漢文教育専門誌である『漢文教室』は1952年に創刊されました。これまでに掲載された漢文を再掲し、漢文教育研究のあゆみを振り返ります。



み解く「永江朗さんと掘り出す」大漢和辞典」。おもしろい漢字がごろごろ出てきます。

☆メールアドレス登録受付中!

サイトの更新情報やメルマガ限定の記事を毎月配信。

☆スマートフォン用

サイトもあります



二〇一五年度センター試験の漢文について

諏訪 原 研
(河合塾)

概要

今年の問題文は昨年と同じ明代の随筆で、程敏政著『篁墩文集』中の一節でした。随筆文の出題はこれで四年連続です。

内容は、血の繋がりのない猫同士が実の親子同様の固い絆で結ばれた話を例にとり、人間でありながら猫にも劣る親子がいることを嘆きつつ、愛情の大切さを訴えた文章でした。前半の猫の例話と、後半の明徳馬后と養子章帝に関する逸話との類似性に気付くかどうか、本文読解のカギになります。本文の総字数は二〇七字で、昨年より二三字増加し、三年ぶりに二〇〇字以上に戻りました。設問数は昨年と同じ七問で、マーク数は一個増えて九個でした。設問数は、二〇一二年に前年の六問から七問に増え、二〇一三年には八問になり、昨年七問にもどって、今年は同数に落ち着いています。

設問内容を見ると、問1の漢字の意味の出題は昨年と同様でしたが、問2に漢字の読み、問3に語の文法的意味と、実に三問を知識問題が占めたのが特徴的でした。残りの理由説

明、訓読、解釈、趣旨に関する出題は例年通りでした。文章の内容及び設問から見て、今年の問題は昨年に比べてかなり易化したと言えるでしょう。

設問の解説

【問1】傍線部(1)「承」、(2)「適」の意味の問題。

(1)「承」の主語が「両小狸奴」(二匹の仔猫)であることから、「承」が乳を受ける行為であることがわかります。河合塾の答案再現データ(以下同じ)による正答率は72%で、よく出来ていました。(2)「適」の副詞の読みには「たまたま」と「まさに」の二つがあり、ここでは文脈から「まさに」と読むときの「ちょうど」が正解です。正答率は62%でした。

【問2】二重傍線部(ア)「将」・(イ)「自」と同訓の語の問題。

(ア)「将」が下の「誕」^{うマント}から返って読むこと、選択肢の語がすべて再読文字であることから、「まさに」(んと)「す」と読む「且」が正解です。ところが、受験生は「将」が再読文字であることは認識しつつも、一回目の読みの「まさに」に

「問題文」

家蓄一老狸奴。將誕子矣。一女童誤触之、而墮。日夕鳴。然會有餽兩小狸奴者。其始蓋漠然不相能也。老狸奴者、從而撫之、徬徨焉。躑躅焉。臥則擁之、行則翊之。舐其涎而讓之食。兩小狸奴者、亦久而相忘也。稍即之、遂承其乳焉。自是欣然以為良己之母。老狸奴者、亦居然以為良己出也。吁、亦異哉。

昔漢明德馬后無子。顯宗取他人子、命養之。曰：「人子何必親生。但恨愛之不至耳。」后遂盡心撫育、而章帝亦恩性天至。母子慈孝、始終無纖芥之間。狸奴之事、適有契焉。然則世之為人親與子、而有「不慈不孝者豈独愧于古人」亦愧此異類已。

(程敏政『篁墩文集』による)

着目して「当」（まさに〜べし）を選択している誤答が、実に正答率37%（全問中最低の出来）とほぼ同率の36%もありました。(イ)「自」は返り点が付いているので、起点を表す「より」の用法だとわかります。正答率は72%で、よく出来ていました。

【問3】波線部(a)〜(e)の文法的意味用法の問題。

それぞれの語の意味用法は、(a)と(d)が、文末の置き字で断定の意味を添える、(b)が、「なり」と読み断定の意味を添える、(c)と(e)が、「のみ」と読み限定の意味を添える、ということ、正解は④になります。文末の助字の意味用法は漢文の基本事項ですが、受験対策の項目としては案外抜け落ちていたものと見え、正答率は59%に止まりました。

【問4】傍線部Aの理由説明問題。

傍線部中の「異」は、「珍しい、特筆すべき」の意で、文意は、「ああ、なんと特筆すべきことではないか」ですから、猫のどういう様子が筆者に感動を与えたのかを考えます。その際、本文中に見える形容語と猫との結びつき（「鳴鳴然」「居然」は老猫、「漠然」「欣然」は仔猫の様子を描写）が、選択肢を判別するカギになります。正答率は63%でした。

【問5】傍線部Bの解釈問題。

傍線部には送り仮名が付いていませんが、「何ぞ必ずしも〜んや」（どうして〜する必要があるか）という反語の句

形であることに気付けば、それほど難しくはありません。もう一つのポイントは「親」で、ここでは「自」（みづから）と同じ意味用法です。以上のことから傍線部の読みは、「人子何ぞ必ずしも親ら生まんや」となり、「子供はどうして自分で生む必要があろうか」という意味になります。正答率は76%で、全問中最高の出来でした。

【問6】傍線部Cの書き下し文の問題。

傍線部は読点によって三つの部分に分けられています。その三つ目の部分「豈独」は、反語の副詞「豈」と限定の副詞「独」によって構成される累加形の文です。限定の副詞「独」はふつう直下の語を修飾しますから、「愧づ」に「のみ」をつけて、「豈に独りく愧づるのみならんや」という読みになります。このことから選択肢は②と⑤に絞られ、最初の部分（世之為二人親与子）の読みが文脈に合う方を選びます。正答率は50%で、全問中二番目に悪い出来でした。

【問7】本文の趣旨説明問題。

前半の猫の例話の内容と、筆者の主張を述べた傍線部Cの意味とを正確に踏まえた説明になっているものを選びます。受験生は②と⑤で迷ったようですが、⑤は子の「孝心」だけを問題視しているので誤りです。正答率は53%と、低調でした。

明暗を分けた問題

今回の試験で正答率が50%以下のものはマーク数でいうと

二問ありましたが、そのうちの一つが問2の再読文字「將」
Ⅱ「且」の読みの問題でした。これは基本中の基本だけに、その不出来は得点差に繋がったと思われます。もう一つは問6の書き下しの問題で、累加形の読みまではできたものの、文脈で決する最後の詰めで正答に至らなかったようです。こう見てくると、やはり再読文字などの重要語の理解、および読解力の差が明暗を分けた感があります。

来年度の出題予想と対策

今年は漢字・語句に関する知識問題が三問もあり、ほかも詠嘆形、反語形、累加形といった基本句形に関わる設問で、基本事項を学習しておけば十分正解にたどり着ける問題でした。そのせいか平均点が30点という好成绩だったわけですが、このことが来年度に問題の難化という揺り戻しを招くのではないかと心配です。したがって、対策としては基本事項（重要語および基本句形）の重視はもちろんですが、昨年のような難度の高い問題にも十分対処できる学力も養っておく必要があるでしょう。具体的には、基本句形以外の特殊な文型・構文の理解や、漢文独特の慣用的な読み方の習得など、かなり裾野を広げた学習が必要になって来ます。

出題文は、ここ四年随筆が続いていますが、ほかのジャンルの文章（史伝や論説）にも触れておくことが大事です。また、漢詩対策も怠らないようにしましょう。

松原 朗 著

『漢詩の流儀——その真髓を味わう』

(四六判・上製・三〇六頁・
本体三二〇円＋税 大修館書店)



本書は、『漢詩の事典』(一九九九年、大修館書店)の第Ⅳ部「漢詩を読むポイント」の一部を、漢詩愛好者のために新しく書き改めたものである。「漢詩のテーマ」「漢詩の歳時」「詩語のイメージ」の三章からなる。『漢詩の事典』は、詩人の伝記、詩蹟等、五部から構成される、総合的かつ高水準の事典であるが、じつは評者が漢詩教育の現場において最も恩恵を受けてきたのは、この第Ⅳ部であった。それだけにこの度、一般読者に向けて本章が一書に改められたことはまことに喜ばしい。

漢詩を読む、というのはそうたやすいことではない。一つは、外国の古典詩である以上、地域と時間の懸隔が大きいことがある。当時の読者にとって自明であった事が、已に分らないことも多い。もう一つは、詩歌の特性として、表現が凝縮・屈折しており、散文に比べて意味や論理が分かりづ

らい、という点がある。たとえば、唐代以降、詩は抒情句よりも叙景句が表現の中心を占めるようになり、王維に至っては全篇叙景というのも珍しくはない。こうした場合、その作品の主題を理解するためには、詩語の「意味」よりむしろ「イメージ」(身体感覚に基づくイメージ、連想、シンボル)を分析してゆく方が有効であろう。よい詩は、主題と無縁なイメージを用いないからである。

そして、もう一つの手掛かりが、モチーフである。これは、主題を理解させる装置のようなものであるから、主題との親近性がきわめて強い。たとえば、「登覧」をモチーフとする詩は、望郷や社会批判を主題とする傾向があり、「懷古」の詩は、人為の儂さを憂う、というように。本書には、「送別」以下、二十類のモチーフが詳述されており、漢詩が何を歌い、何を歌わな

かったのか、も含めて、一読、その全貌を伺うことができる。

とはいえ、詩材については、日本の詩歌となんら変わりはない。月、雲、霞等の自然現象や、菊、楓、鶯、鹿、蟬、螢等の動植物は、和歌や俳句で見慣れたものである。しかし、本書を通じて漢詩におけるそのイメージを確認してゆくと、日中の文化の間に意外な相違のあることが分かってくる。「思婦(もの思う女性)を美しく飾り立てる」「漢詩の「螢」が、なぜ和歌では露の如き儂いものとなり、また夜啼く「烏」が、日本ではなぜ明け方に啼くのか。こうした日中比較の視点を取り入れて、漢詩と和歌をクロスオーバーできれば、漢詩に興味のない学生たちにも新たな知的刺激を与えられるだろう。そもそも今日、日本人である私たちが漢詩を読む最大の意義は、日本の詩歌との比較によつて、より深く日本の文学(日本的なるもの)を理解することにある。本書の序章「漢詩と余韻の美学」では、この点に関する新しい解釈が示されており、示唆に富む。本書を、漢詩の専門家のみならず、日本古典文学に興味をもつ人にも広くお薦めする所以である。

(井上一之・群馬県立女子大学)

小曾戸 洋 著

『新版 漢方の歴史——中国・日本の伝統医学』

(四六判・並製・二六四頁・
 本体、七〇〇円＋税 大修館書店・あじあブックス)



小曾戸 洋・天野陽介 著

『針灸の歴史——悠久の東洋医療』

(四六判・並製・二九六頁・
 本体、八〇〇円＋税 大修館書店・あじあブックス)



両書は、中国をはじめとする多様なアジアの文化を一九九八年以来、十数年にわたって紹介してきた「あじあブックス」のシリーズ第七六・七七冊目として刊行された。本シリーズにおける医学史・科学史の専著としては、一九九九年の小曾戸洋氏の『漢方の歴史——中国・日本の伝統医学』が最初で、本草学を取り扱った川原秀城氏の『毒薬は口に苦し——中国の文人と不老不死』（二〇〇一年）が続き、その後しばらく途絶えていた。そこに昨年九月、『漢方の歴史』が大幅に増補改訂されて（一九六頁→二六四頁。附、年表・生薬解説・索引）新版となつて加わり（以下、『新漢方史』）、更に本年一月にその姉妹篇として小曾戸洋・天野陽介両氏による『針灸の歴史——悠久の東洋医療』（以下『針灸史』）が備わった。

文献研究の成果がバランスよく増補されており、入門書としてだけでなく、最新の研究動向を知る上でも有意義な改訂になっている。主な増補部分は、馬王堆出土医書『五十二病方』の復元研究、六朝期における本草書の継承、宋版『孫真人玉函方』等であり、資料豊富な江戸時代の記述も大幅に増補された。増補部分からも著者の書誌文献研究を基盤とする研究方法がよく看取される。

「初めての、針灸のコンパクト通史」という帯のコピーがその意義を端的に示す『針灸史』においても小曾戸氏の基本姿勢は変わらないが、いくつかの特色も認められる。

「初めの、針灸のコンパクト通史」という帯のコピーがその意義を端的に示す『針灸史』においても小曾戸氏の基本姿勢は変わらないが、いくつかの特色も認められる。

第一章「序説——宇宙と自然と人」では、宇宙論・生命論・陰陽論・五行論がわずかに一六ページで分かりやすく面白く概説され、初学者にも読みやすい。

第四章「針灸の成立」では漢墓出土医書

(町 泉寿郎・二松学舎大学)

岸田知子 著 『漢語百題』

(四六版・並製二八八頁・
本体、八〇〇円＋税 大修館書店)

偶然、インターネット上に岸田知子先生の『漢語百題』のサイトを見つけたのは、七年ほど前だったろうか。真っ先に読んだのは、「諱」の項であった。簡にして要を得た説明と、豊富な実例に惹きつけられ、すぐに他の項目もプリントアウトして、何度も読み返した記憶がある。

それまでは、若い先生から「漢文を教えるための教養を身につけるには、どうしたらいいですか」と尋ねられると、「高島俊男さんの『お言葉ですが』シリーズを読むといいですよ」と助言するのが常だったが、これ以来、質問には「岸田先生の『漢語百題』で勉強しよう」と答えることが習慣となった。

その『漢語百題』が、今般書籍化された。早速目を通すと、改めて著者の学識の深さと発想の豊かさ、確かな筆力に感服させられる。一例を示そう。助字の「遂」は、



「ついに」という訓から、「とうとう」と誤って解釈されることが多い(現にある漢和辞典は、最近の改訂までこの訳を載せていた)。では、なぜ「かくて」と訳さなければならないのか。その詳細はここでは触れないが、本書にヒントを得て、「隧道」(トンネル)の語を使って説明したところ、高校生の反応は上々であった。さらに、「わかりにくいときは『遂』を飛ばして訳すほうが、『とうとう、おわりに』と誤訳するよりいいのではないかと思う。」という著者の指摘は卓見であり、漢文を教える者に安心感を与える。

漢文の授業を行う上で、漢文を専門とする教師が現代文や古文を専門とする教師と異なる点があるとすれば、学生時代に授業や演習で、師から口伝を受けたか否かの差であろう。授業の準備に注釈書や辞典を用いるのは、どちらも共通である。ところが、

注釈書や辞典の説明は簡潔すぎて、知りたいたいことの半分もわからないことがある。大学の講義では教わるが、注釈書や辞典では省かれるもの、これを先ほどは「口伝」と表現したが、これの有無が授業の幅、厚み、豊かさに影響するのではないだろうか。本書は、漢文専門ではない教師の要求にも、確実に応えてくれる。『漢語百題』を読むか読まないかで、今後の授業の質が変わってくるにちがいない。

漢字、漢語の誤用に関する歯に衣着せぬ指摘も、本書の魅力の一つである。たとえば浅田次郎氏の誤解への言及(「字」の項)や、昨今のいわゆるキラキラネームの流行に対する警鐘(「未央」の項)は、読者を胸のすく思いにさせる。漢文教師ならずとも、手にしたい一冊である。

今までネット上の情報として接してきた本書を書籍で再読して、読みやすさだけでなく、理解の深さも比較にならないことを実感した。縦書き、横書きのちがいを以外にも、電子と紙の相違点は多くある。紙媒体の優位性を再認識できたのは、思わぬ副産物であった。

(塚田勝郎・筑波大学附属高等学校)

塚田勝郎 著

『新人教師のための漢文指導入門講座』

(B5判・並製・二六〇頁・
本体三二〇円＋税 大修館書店)



私事ではあるが、勤務校にて漢文の授業をしていると、生徒から「なぜ中国の古典を勉強しなければならないのか」という質問を受けることがある。学習指導要領を紐解けば、生徒が納得しそうな答えはいくつも載っている。曰く、日本が中国の文化を取り入れ、そこから独自の文化を発展させてきたから。曰く、漢文訓読体が現代でも文章表現の骨格の一つであるから。しかしながら、学生時代に多少なりとも中国古典に触れてきた身としては、こう答えずには

に記されたものではない。それと共に、「教師自身が漢文の面白さを認識すること」も重視している。

中国の古典は面白い。だが、その面白さは生徒にとつてわかりにくい。そこで教師が理解の手助けをする必要があるが、それには教師自身が漢文を面白いものと認識している必要がある。著者も述べているとおり、自分が面白いと思えないものに生徒が惹きつけられることはないのである。

それでは、教師が漢文の面白さを認識するためにはどうすればよいのか。本書では一つの方法が提示されている。それは「自分が面白いと思うまで教材研究をする」というものである。そして、教材研究の一例として、定番教材である『矛盾』において、作者である韓非子が盾と矛を商う者が「楚人」と設定した理由を考察してみることが挙げられている。具体的にどのような考察

ができるかについては実際に手にとつて確認していただくことにして、その他にも漢文の面白さを再確認する上で助けとなりそうなヒントが随所に見られた。この本を通じて、著者の塚田先生に「奥深い漢文の世界に真摯に向き合えば、きっとどこか「面白い」と感じる部分が見つかる」、「生徒もその面白さをきつと分かってくれる」と、背中を押していただいたように感じた。

なお、本書は第三章＋資料編という構成になっており、第一章では返り点や書き下し文の指導をする上でのポイントなどがまとめられている。また、第二章では教材研究の方法やノート指導の要点、第三章では定番教材の具体的な授業実践例や評価テストの例が豊富な板書例とともに示されている。巻末の資料編には、漢文を教える上で役に立つブックガイドが載っており、また現役の教員や教育実習生からの質問に著者が答えていくQ&Aコーナーなども設けられている。実際に漢文を教えるにあたって役に立つことがらが網羅されており、「新人教師」以外の方にもおすすしたい良書である。

(橘和久・城北中学高等学校)